津田昇平教話　第十六話

令和三年一月十六日　朝の教話

打ち込んだ杭もゆすらにゃあ抜けぬ。長い病気じゃから一度には良くならぬ。次第次第にお陰が受けられる。

おはようございます。令和三年一月十六日の朝をお迎えさせて頂きました。

教祖様のご理解の中でも、一昨日の「大厄(たいやく)は小厄(しょうやく)に」、金だらいの水をね、いっぱいためて、どーっと流したら大難(だいなん)、ぞろぞろと、少しずつ流していくのは小難(しょうなん)っていう、そういう教えを受けて、昨日は、信心して、大難は小難、小難は無難にまつりかえて頂くという、そういうお話をさして頂きました。せっかくですんで、今日も少し、それを続けさせてもらおうと思います。

大難は小難にして頂く。大厄は小厄にして頂く。その時に、ドーッと大きな津波(つなみ)のようなものが来て、呑(の)み込まれてしまうと大難になります

けども、そこを少しずつ、少しずつ、分割払いにしてもらう。分割でもって、お取り払い頂いていくということが大事なことで、命をお守り頂きながら日々の暮らしを、信心して、信心さして頂いてる限りは、お守りを頂き、頂きつつ、お取り払いもおかげを頂いていく。天地に対する借金も、お取り払い頂いていくということやと思います。

その時にですね、よくあることなんですけれども、その折節（おりふし）のお取り払いというのがございまして、ちょっと良くなったなぁ……と、苦しいところを凌（しの）いで、ちょっと良くなったなぁと思ったら、またしんどくなることが出てくる。で、そこをまた信心さして頂いて、凌がして頂いて、ホッとできたと思ったら、少し楽になるんですね。そうすると、どっと

しんどい時期がまた来て、これを繰り返していく。

ま、考えてみたら、分割払いやと思うたら、そんなもんやとは思うんですけど、分割払いと言いましても、毎日分割っていうよりは、月に一度分割っていうぐらいで考えたらね、支払いでも。まあ世間でいうローンもそうだと思います。月に一度、支払っていく。そうすることで、一気に全額を返済するっていうわけじゃなくて、毎月毎月、決まった額で引き取ってもらう、お支払いする、ということやと思います。

天地(てんち)の道理(どうり)で、人の命が懸(か)かってる事柄、でも、やはり、難儀(なんぎ)というもの、大きい難儀を小分けにして頂いて、それをお取り払い頂く。そん時はすごくしんどい。それは体であれ、心であれ、財であれ、人間関係であ

れ、苦しいんですけれども、でもそこを凌がせて頂いたら、すっと楽になるんです。すっと楽になって、「ああ、よかったなぁ」、場合によっては、「これで治ったんかなぁ」と思ったら、それはあてが違って、また次の支払い時期が来る。お取り払いの時期が来る。そしたらまた、しんどいことが起こる。で、「またかぁ」って思うんですけれども、そこを凌がして頂いていくと、また楽になっていく。「あぁ、やれやれ、楽になったなぁ……」と思うて、これでもうそろそろと思ったらあてが違って、またしんどいのがやって来る。

で、これがまあ、「またか、またか」って、ま、人間思うんですけれども、まあ私の体感で言わしてもらいましたら、まだかまだかって言うて

る間はまだ来るんですよね。もうその辺も覚悟(かくご)ができて、もうこら何度でも来るんやし、何度来てもまあいいや、もうその都度その都度、今月今日(こんげつこんにち)、もうその時その時、一日一日を生きさしてもらおう。またしんどくなったら、その日一日、楽にならして頂いたらその日一日、お礼を申し上げ、お願い申し上げ、お縋(すが)りしながら、神様金光大神(こんこうだいじん)様と一緒(いっしょ)に、そこを一日一日過ごさして頂こう、ということになってくると、そしたらまた来るとか、来ないとかっていう問題は、あんまり大した問題じゃなくなってくるんですよね。

その日、その日が全てになってきますから。そうなっていくと、案外早く終わってしまうということが多いなぁと。まだ来るんか、まだ来る

んか、って言う間はまあ、まだ来ますよね。で、「もういつ来てもいいし、もう何度でも来て頂いても結構。それももうお任せします。もう私は一日一日、過ごさして頂くばっかりです」って言うて、ほんとに芯(しん)から、それが腹で分からして頂いたら、早いもんやなぁと思いますね。こらもう、何度も繰り返し、そういうおかげの頂き方っていうのを体で覚えさしてもらいますと、またか、またか、っていうことも、段々減ってくるなぁと思います。

教祖様のお広前(ひろまえ)に、秋山甲(あきやまきのえ)さんっていう女の子がお参りをされました。当時、十五歳やったということでね。お母さんの病がお参りをするきっ

かけになりました。その当時、お母さんはずっと病気がちやったんでしょうね。お母さんは四十五歳で、甲さんという女の子は、十五歳やったそうです。で、お母さんが長い病気を患(わずら)って、苦しんでおられたので、おかげを頂いてもらいたいなぁと、娘ながらに思ったんでしょうね。そして、近所のおばあさん、塩飽(しわく)きよさんという方なんですけど、この方が、金光様（教祖様）のところにお参りをしていた。そこで、おばあさんに連れられて、十五歳の秋山甲さんが、金光様んとこにお参りをさして頂くことになった。

で、まだ十五歳というのんで、数えで十五歳ですから、今で言うたら十四歳ぐらいになるんでしょうかね。金光様の前に行ってお話をすると

言いましても、やっぱりまあ緊張(きんちょう)もあるし、恥ずかしさもあるかもしれません。連れ立って下さった、塩飽きよさんっていうおばあさんがですね、成り代わって、こうお届けをして下さった。甲さんはすぐ横にいたのかもしれませんね。

そうすると、きよさんがですね、お母さんのこと、四十五歳のね、長らく患ってるお母さんのことを、こうお届けされたんです。

「長らくの病気でございますが、治るでありましょうか」

【理Ⅱ　秋山甲(あきやまきのえ)　一より抜粋】

と、きよさんがお伺いしてくれたと。すると金光様は、きよさんじゃなくって私の方、甲(きのえ)さんの方ですね。娘さんの方、ま、実の娘さんではないですけど、甲さんの方に向かって、金光様は、

「病気が治るのがよいか、治らないのがよいか」

とおっしゃった。

【同】

で、甲(きのえ)さんは何と返事をしてよいのか分からずに、もじもじされてた、黙っていたと。そうすると、金光様は重ねて、

「治る方がよいのであろう。治してもらいに参って来たのであるから、治るであろうかと思ってはならない。今日からしだいに全快におもむくと思え。しだいしだいによくしてもらい、体が丈夫（じょうぶ）になってきさえすれば、年はとっても病気は治る。しだいによくなると思って信心せよ」

と仰せられた。

【同】

きよさんが、「長らくの病気でございますが、治るでありましょうか」って聞いたんですよね。ま、甲(きのえ)さんが直接聞いたわけじゃないけれどもまあ率直(そっちょく)なことなんでしょう。「治して下さい」の前に、長らくの病気で、長い間患(わずら)ってることなんでね、「あのー、これ治るでしょうか?」って、金光様にお伺いを立てたんですよね。で、金光様は、きよさんの方、おばあさんの方ではなく、お参りした十五歳の甲さんの方に向かって、「治るのがいいやろう」と。「治してもらいに来てるんやから、『治るであろうか。治るんやろうか、ほんまにどうやろうか?』って思ってるようではこらいかん」と。治してもらいたくて参ってるんやから。今日からしだいに、今日という日、今日お参りをさして頂いたこの日から、し

だいに良くなっていくんや、と。しかも、ただ良くなるんじゃない。「全快におもむくと思え」って、「思いなさい」って仰ってるんですね。

で、次第次第に良くなっていく。すぐにとは仰らない。次第次第によくなっていく。で、「体が丈夫になってきさえすれば、年はとっても病気は治る。しだいによくなると思って」、やっぱりここでも、「しだいに」ですよね。すぐにっていうんじゃない。「しだいによくなると思って信心せよ」、やっぱり「信心せよ」なんです。信心してってことです。ここが大事ですよね。

しだいによくなると思いなさいという、ただそれだけじゃない。「しだいによくなると思って信心せよ」と。信心しておかげを頂きなさい、と

いうところ。ここがすごく大事なところなんですよね。

まあよくお話してますけれど、祈念祈祷（きねんきとう）で助かるわけじゃない。足をただ運びさえすればそれでいい、単純なもんでもない。「ご祈念して、ご祈念してもらって、後はもうしーらん」、そうじゃないんです。信心を習いに来てるわけですから、お参りをさして頂いて、話を聞かして頂いて、教えて頂いたことを心にかけて、わが身わが一家を練習帳にして、日々の暮らしの中で、心を神様に向けて、お礼を申し、お詫（わ）びを申し、お縋（すが）り申し上げていく。そういう信心生活を続けていくという、それをしっかりしていきなさいっていうことを仰ってるわけですね。それが「信心せよ」。で、それでまあ、お取次（とりつぎ）が終わって帰ることになった時に、おばあ

さんのきよさんが甲さんに、こう言われたんですよね。

「（金光様はね、）『親のために信心するのは親孝行になる。親に孝行をして信心すればおかげが受けられる』と言われたのですよ」

【同】

と教えてくれた、と。金光様はそういうふうにして仰ったんでしょうね。甲（きのえ）さんは、全部が理解できたかどうか分からないんで、だからきよさんが、金光様のお取次のことで仰ったことを、甲さんにまた分かるように

言って下さった。ここで大事なのは、「親のために信心する」、やっぱり信心するんですよね。信心せんかったら、おかげは頂けない。信心しておかげを頂きなさい。だから持ち帰ってもらわんといかんことは、「信心しなさいよ」ってことを、甲さんに、娘さんに言ってるわけです。参ってきて、ご祈念して、あとは大丈夫っていう話じゃなくって、おかげを頂ける信心をしなさいよ、と、娘さんに言ってるわけですね。

自分自身が困って信心するというよりも、親が助かってほしい、長らくの病で苦しんでいるお母さんをどうぞ助けて下さいと思って、お参りにきたわけで、その親のことを思って、親に助かって欲しくって、病気が治って欲しくって、その親のために信心するというのは、もうそれ自

体、親孝行やと。立派なね。で、その親に孝行して、信心する。親のことを思って、親の助かりを思って信心すれば、そうすればおかげが受けられる。信心すればね、っていうことを仰った。

で、帰ってから、甲さんはですね、過ごすわけですけど、まあこのように述懐（じゅっかい）されとるんです。はじめ一時（いっとき）に、お参りしてから、ずっとよくなった。けれども、一ヶ月二ヶ月の後に、また、同じ症状が現れてきた。で、「よくなったと思ってたのになぁ」と。ま、正直な気持ちですよ。そう思いながら、また甲さんは金光様のお広前（ひろまえ）にお参りをした。せっかく良くなってたのになぁ……と思ってたけれども、また悪くなった。で、まあそう思いながらお参りしたら、

金光様は、

「つらいつらい、また病気が起きたと思っているであろう。しかし、しだいに取りさばきをいただくのであるから、だんだんと荷が減っていって、軽くなっているのである」

と言われ、しだいによくなった。

【同】

せっかく治ったと思って、ああよかった、よかったなぁ、と思ってた

らまた、お参りして一、二ヶ月たったら、同じ症状が出てきて、「良くなったと思ったのにもう、残念やなぁ。治るんやろうか」という気持ちになったんでしょ。でもそうしてお参りしたら金光様は、『つらいなぁ、つらいなぁ。また病気が起きてしまったなぁ……』って思ってるやろ、お嬢(じょう)ちゃん」と。「けれども、しだいに取りさばきを頂いていくんや」、ここでもやっぱり、「しだいに」、「しだいにしだいに」って仰ってますね。「しだいに取りさばきをいただくのであるから、だんだんと荷が減っている。少しずつ荷が減って、軽くなっているのである」と、言われたと。これは非常にありがたいですよねぇ。心強いお言葉ですよ。で、「そのお言葉通り、しだいに良くなった」とこう言われるんです。よかったなぁ

と思う。

ところがです。それから半年ほどした時に、お母さんが洗濯(せんたく)をしていた。まあ、体を起こせるぐらいになったんでしょう。洗濯をしてるうちに、突然鼻血が出始めて、金だらいに二合も三合も出た。まあすごい量ですよ。今、御神前(ごしんぜん)に一升瓶(いっしょうびん)がお供えされてますけれど、あれがまあ一升やとしたら、二合三合って言うと、多く考えたらまあ三分の一か四分の一ぐらいあるわけです。鼻血でそれだけ出るというのは、まあないですよね、なかなか。

そしてその夜、みんな母の枕元(まくらもと)に集まっていた。それぐらいもう、これはもういよいよと思ったんかもしれませんね。ただごとじゃない、と。

鼻血が出始めて、もう二合も三合もって止まらんかったんですから、そらみんなびっくりしたでしょう。で、みんなお母さんの枕元に集まっていた。

その時に甲(きのえ)さんは、まあまだ幼いこともあったかもしれませんけれども、

私は、うとうとしているうちに、金光様が来てくださったことを夢に見て驚(おどろ)いた。

【同】

と。ありがたい御夢頂(みゆめ)かれましたね。で、翌朝になって、お母さんが、こうこうこういう状況なんだということを、初めてお参りした時に一緒に来て下さった、塩飽(しわく)きよさんというおばあさん、そのおばあさんに、代参としてお参りをしてもらったんですね。

そうすると、きよさんは金光様のところにお参りをして帰ってきた。で、それを甲(きのえ)さんに、こう話をされた。金光様が言われるのはですよ、こうして今回またね、鼻血が大量に出たわけですけど、そのことですけども、

「また、取りさばきである。長の病で(※長らくの病で)、

しだいしだいによくなるのであるから、何も心配をする
ことはない」

【同】

と、金光様が言われたと。そしてその通り、しだいによくなったというふうにして、教典に書いておられますね。これ、何度も何度も、良くなって、また悪くなって、良くなって、また悪くなって……っていうことを繰り返してるんですよね。そうして、そもそもが長く患っている病ですから、根が深い病、一つの難儀(なんぎ)で言ったら、根が深いわけですよね。根が頑丈(がんじょう)なんです。だから、一回の取り払いで治るというわけにはいかんの

ですよね。

だからそれを、長らくの、長い期間の、根の深い病やから、すぐには簡単には治らないけれども、でも、信心しっかりし続けていたら、神様がしだいしだいに、良くなって取り払って下さって、良くなっていくものやから、心配することはない、というふうにして仰った。

で、まあ事実、信心をされたんでしょう、甲（きのえ）さんはね。そしたら、ちゃんとやっぱり、おかげを頂くことができた。っていうふうにして、残しておられます。で、これはまあ教典に載（の）ってるんですけれども、教典の『人物誌』（※『金光教教典』中に出てくる人物全てをとりあげ、解説したもの）というのがありましてね。そこをちょっと読んでみるとです

ね、秋山甲(あきやまきのえ)さんのところに、その当時のことを書いているわけですけれどもね、そこでは、今のみ教えと同じところであろうと思うんですけれども、ま、ちょっと書き方が違うんですよね。甲さんがもちろん、教典が編さんされる時に、話をされたか、書かれたか分かりませんけれども、まあどちらかで、それが編さんされたわけですけれども、その時にはもっと年齢も、大人になったか、まあご高齢かになってらっしゃるでしょうね。

そん時に残しておられるのが、金光様のところにお参りした時ですね、角灯籠(かくとうろう)が掲(かか)げられていた、と。で、さとうきびやみかんなどを売る屋台が、四軒、五軒、出ていた、と。その当時にね。で、金光大神様(こんこうだいじん)を通じ

て、お母さんの病気について、お知らせを頂くことになった。金光様がね。「子（ね）の年母願い成就、金光大神聞き済み申す」と、お知らせを受けた。「しっかりと聞き届けて、神様にお届けを済ませました」っていうことを仰った。で、金光大神様（金光様）からは、「治るのがよいか、治らぬのがよいか」と、やっぱり聞かれた。で、何と返事をしてよいか分からず黙っていると、

「治るのがよいのじゃろう。治らねば困ろうが。親の病気を信心してお陰を受ければ親には孝行となり、お上には忠義となるのじゃ」

【金光教教典　人物誌
秋山甲（あきやまきのえ）／十一～十二頁より抜粋】

ま、お上のこともここに書いてありますね。また後日、ここからが教典にはちょっと書いてない部分もあるなぁと思います。これはまあ、また病気になって、治ったと思ったら、また病になった。またおんなじ症状（しょうじょう）が出てきたと思って、少し、まあ言わばへこんでお参りした時なんでしょう。

また、後日、

「打ち込んだ杭(くい)もゆすらにゃあ抜けぬ。長い病気じゃから一度には良くならぬ。次第次第にお陰が受けられる。時々病気がおこっても、困ったなあと思うな。有り難いお取り払いと思って、お陰を受けよ」

と教えられた。その後、登美（お母さん）は、医者にもからず薬も飲まず、全快した。

【同】

というふうにして書いておられますけれども、もう一度読んでみましょう。

「打ち込んだ杭(くい)もゆすらにゃあ抜けぬ」、杭、まあ釘(くぎ)でも杭でもそうですけれども、深ーく刺さったものを抜こうと思ったら、真っ直ぐ抜こうとしても、非常に固くて抜けないということ、確かにありますよね。で、そういう時どうするかって言ったら、やっぱりこう、まあ私もそういう経験ありますけど、思いっきり真っ直ぐ抜こうと思ってもパッと抜けないんですよ。太かったり、まあ固かったりするとね。木も、年数が経って、硬(かた)ーくなってると、すぐには抜けないですよね。でも、そん時に揺(ゆ)らすと、確かにこう、揺らすんですよ。そうすると隙間(すきま)ができる。で、そして抜くことができるっていうことなんですね。

これ、揺らすっていうのはどういうことかと言ったら、良くなったり、

悪くなったり、良くなったり、悪くなったり……これ、揺れてる状況ですよね。良くなったなぁと思ったら、また悪くなる。で、また信心したら良くなった。あぁよかった、と思ったら、まーた悪くなった。これ、揺れとる状態です。だから、一回だけじゃなくて、何度も揺れがある。良くなったり、悪くなったり、その繰り返しがあるということです。そうする中で、深く食い込んだ杭も抜くことができるということを仰ってる。

「長い病気じゃから」、そうですね、長らくの患いですから、長い病気じゃから一度には良くはならないという、これも道理（どうり）ですよね。ちょっと風邪（かぜ）をひいて、よく休んで、そして良くなる、というのとは、ちょっとわけが違う。一年、三年、五年、あるいは場合によったら、十年、二十年

っていう長らくの病であれば、それだけ根が深いわけですから、一度に良くなるってことは、これはあり得ないんですよね。何度もこれは、揺らされて、揺らして、繰り返し、繰り返ししながら、抜いて頂くしかないです。

「長い病気じゃから一度には良くならぬ。次第次第にお陰(かげ)が受けられる。時々病気がおこっても、困ったなあと思うな」って、こう仰る。困ったなあと思うなって言われても困りますけど、まあ、そうなんでしょう。「時々病気がおこっても、困ったなあと思うな」、つまりこれは、心配せんでもよいということでしょうね。「もう、いちいち困った困ったって言うな」って、まあそうでしょう。神様の方からご覧になったらそうです

わね。いちいちドタバタドタバタ、ジタバタジタバタせんでよろしい。神様にお縋(すが)りして、信心して、助けてやろうとして下さっとるんやから。もう一気にパッとは抜けへん、と。一気に抜こうと思ったら、身が持たんのです。そしたら、大難(だいなん)になるし、大厄(たいやく)になるし、持たんのです、命がね。

だから、一時(いっとき)悪くなったと思っても、お取りさばきでしんどいと思ってもね、でもまた楽になる。そしてまあ言うたら、精根(せいこん)を少し蓄えて下さる。で、また次のお取り払いがくる。またそれで、ずいぶんと疲れがあるでしょうね、取って頂いたら。でもまた段々と良くなった。良くなったらまた抜いて下さる。それを繰り返していくわけですよ。

だから、病気と言いますかね、時々病気が起こっても、もう治ったと思っても、また出てきても、もう困ったなぁと思うな。もういちいち思わんといてくれ、と。それは当たり前のことなんや、と。長らくの病気であれば、一度には治らぬ。打ち込んだ杭だって、揺らさんと治れへんのや、抜けへんのやと。「次第次第にお陰が受けられる」、これ、繰り返し仰ってますでしょ。「打ち込んだ杭も揺すらにゃあ抜けん」、これもそうだし、「長い病気じゃから一度には良くならぬ」、これもそうやし。「次第次第にお陰が受けられる」、これもそうでしょ。「時々病気が起こっても困ったなあと思うな」、で、これ、四回もね、繰り返し仰っとるんですよ。良くなって、悪くなって、でも、それをいちいちもう言わんでよろしい。

そんなもんなんや。

「有り難(あ)いお取(がた)り払いと思って、おかげを受けよ」、ここ大事ですよね。

「有り難いお取り払い」「困ったなあと思うな」と。だってそれ、今の今、神様が抜いて下さってる最中なわけでしょ。悪いところを取って下さってる真っ最中なんでしょ。これ、ありがたいじゃないですか。「や、痛いから結構です」って、これで逃げたらどないなりますか。もう刺さったまんまでしょ、杭は。深く刺さった杭が、自分の命を、人生を、苦しめて難儀(なんぎ)にさせるわけでしょ。一生懸命(いっしょうけんめい)生きててもね、本人は。

でも、上手くいかんのですよ。杭がありますから。杭が刺さっとんですから。体も心も財も人間関係も、仕事も家庭も学校、どこにでも、この

突き刺さった杭は苦しめますよ。だからそれを抜いてやろうとして下さる。で、これ、「有り難いやないか」と。そうですよ、ありがたいですよ。だから時々病気が起こっても、困ったと思わんでよろしいと。そういうもんなんやから、長い病気やったら、当たり前のことやと。一回一回、神様の有り難い、勿体(もったい)ない、畏(おそ)れ多いお取り払いを、神様がして下さってるんやから、「ありがとうございます」と言うて、おかげを頂きなさい、ということを仰ってるわけですね。

まあそのようなわけで、信心さして頂いておりましたら、ほんとにこう、神様のおかげを是非(ぜひ)とも頂きたい。ま、昨日今日起こったことを昨

日今日おかげ頂きたいっていうお願いもあれば、もう生まれてからこの方っていう、長らくのものだってあるでしょうね。そういう根っこの部分から、時間をかけて、十年二十年かけてでもいいから、神様に取り払って頂きたいということがある。そういう根の深いものっていうのは、やっぱり時間はかかります。それは体の病でも、心の病でも、財の病でも、人間関係の病でも、仕事の病でも、何でもそうですよね、家庭の中の病でもそう。何でもそうです。どんな病でも、根が深いものっていうのは、信心したらおかげは頂ける。ただし、根が深ければ深いほど、時間はかかる。

でも、良くなったと思って、また悪くなって、良くなったと思って、ま

た悪くなる。そら、打ち込んだ杭も揺すらんかったらこれ、抜けないからしょうがないんや、と。でもそれをいちいち、もう「困った、困った」と、大きい声で騒ぎ立てんのはやめなさい。ありがたいお取り払いを頂こうと、ここぞおかげの頂き時と思って、

やれ痛やという心で、ありがたし、今みかげをという（そういう）心（持ち）になれよ。

【理Ⅲ　神訓（しんくん）　二－四七】

というのはそういうことですね。

ああ、ここでおかげを頂こう。ありがたい神様が、「今、信心さしてもろうておかげを頂け」と言うて下さってる。神様が今、抜こうとして下さってる。「ありがたいおかげ蒙(こうむ)らせて下さい」と。「しっかり信心さしてもらいなさい」っていうことを仰って下さってる。もう、そうすればおかげを頂けるし、あとは繁栄させてもらえる。悪いものは自分とこで食い止めて、良いものを周りに、家族やら、子や孫に伝えることができる。そのために、今、しっかりと信心さして頂きましょう、ということを仰ってるんですね。

ま、お互いに生きてて、前々(ぜんぜん)のめぐりということもありますから、大変なことが起こることもあります。でも、そんな時でも、しっかりと信心

しておかげを頂いていく。信心したら、いろんなことが起こっても、それでも、信心続けてたら、必ずおかげは頂けるから、だから、良くなった、悪くなった、良くなった、悪くなった、というところに一喜一憂(いっきいちゆう)せず、なんぼ起こってもいいから、しっかり信心して、根っからおかげを頂こう、根を切って頂くおかげを頂こう。そういう信心をさしてもらいたいなぁと思います。

とは言いましても、一日一日ですから、今日は今日で、今日の信心を神様と一緒(いっしょ)に、金光大神様と一緒に、教えて頂いたみ教えを大事にしながら、今日の信心のお稽古(けいこ)にそれぞれ、わが身、わが一家の中で、信心に

励(はげ)んで下さい。今日は今日で、信心の修行がありますからね。家業の行ですから、しっかり信心の稽古に励んで下さい。

よくお参りでした。

（了）

津田昇平教話　第十六話

令和三年一月十六日　朝の教話

令和四年十月二十一日　初版発行

発行所　金光教尼崎教会

〒六六〇―〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三―七―五